

昭和の南海地震体験談

氏名:小阪 英二(こさか えいじ)
生年月日:昭和10年9月23日
地震を体験した場所:田辺市
当時の家族状況:父、母、姉三人、弟、妹二人



1) 地震発生時の状況

当時 11 歳、地震で飛び起きた、腰が抜けると思うほど強い揺れだった。

当時の家は、大きな岩の上に建つ、天理教教会で、父が病気で寝ていて、「安政の地震でも、ここまで津波が来なかったから、俺はここを動かん！」といったので、家族全員、家の窓から、暗い海を見ていた。

2) 津波襲来時の状況

屋根瓦の“バリバリ”割れるような音が聞こえて、10~15 分した時、“パンパン”海が鳴いた(海鉄砲)。

下のほうの、近所から「津波来るぞ~！」と聞こえ、“バリバリ”音を立てながら、海が、白い波が先端にあって大きな音をさせて津波が見えた。

流出した家の屋根の上で、4,5 人の人が「助けてくれ~」って言って流れて来て、引き潮で又、流れて行って、次に来た時は、

3 人ぐらいに減っていた。繰り返して、いつの間にか瓦礫だけになった。

夜が明けてくると、窓から被害がよく見えて、流出した船や家や家財道具があちこちに見えた。

自分の家にたくさんの方が避難してきた。13 軒位の家族が、2~3 ヶ月寝泊りしていた。



3) 家族の行動・被害

家族全員無事、大きな津波が引いた後で、裏山に避難して、昼まで、山から下の様子を、見ている。

4) 集落・周囲の被害

家に上がる坂の下に、溺死体あり、知らない人だった。

斜め前の田んぼに、流出して来た家があって、20日位経って、瓦礫の下から、搜索しても見つからなかった、その家の住人が(お祖父さん)遺体で発見された。

市全体では 69 人死亡。馬や牛、鶏もたくさん死んでいた。

5) 地震・津波後の生活

家は、水に浸からなかったのだが、地震津波後、13軒もの避難した人を抱えて、食べ物に苦労した父は、私に、村のあちこちで、死んだ鶏を拾って来るよう指示し、それで鶏のすき焼きを食べて貰った、村のあちこちに流出したさつま芋や、パイナップルの缶詰を、拾って食べたこともある、おいしかった。

その避難していた人達は、昼間は、自分の家の片付けに行き、夜には天理教の広間で寝る生活していた、2~3ヶ月で家財道具など調べて帰って行った。

6) 次の災害への備え

津波対策委員長であり、老人会会長しているので、有事の時は役割分担(誰が川の潮位を見るなど)して声掛け、体が不自由な人を背負い、避難場所まで行くというマニュアルがある。

津波対策委員会では、防災システム、自主防災組織を作っている。学集会を開いたり、防災訓練をしたり、子供達への伝承、学者を呼んで津波のメカニズム等の知識を増やす活動、津波警告板を設置、視察旅行に行く等、色々と活動している。

この地区の避難場所が素晴らしい。地区の土地に(なだらかな山、地区の人が徒歩で行ける距離)太陽光発電のライトがある、広い(2,500 平方m)土地が避難場所として整備されている。すぐそばには、建設省の緊急備蓄庫が、ある。



7) その他

当時の感想は、私は今の子供のように、しっかりしていなかったと思う。情報も無いから、驚きと興味で、手伝いも楽しんでやった。

小学校(当時 11 歳小学 4 年生)の片付けや掃除も行った。

家の近所で、家族と離れた人が、家族を捜すのに、「これ違う」「これ違う」と遺体をめくって、顔を改めて行く姿を見ている。



<新庄避難所>